



雲の峰

一歩先のあなたへ

永田 和宏



17 思考の断片化

手紙を書くとき、返事が気になる。早く来ないものかと心待ちにする。返事が来て、封を開けるときのちょっとしたときめきは忘れられないものだ。それが恋文、ラブレターるときは特に亡くなった妻、河野裕子の遺品の整理に実家へ行ったとき、箱にしまわれている手紙の束を見つけて驚いた。彼女から私へ送られたもの、私から彼女へ送ったもの、総数300通ほどもあったのだろうか。結婚してから、河野がそれらを一緒にして箱にしまい、実家の押し入れの奥にしまいこんだものらしい。

ほとんどが封書。お互いの家族には見られたくないこともあったのだろうが、それ以上に葉書では伝えられない思いを模索しながら書いていたことが大きかったのだろう。

返事は待ち遠しいが、あまりにも早く返ってきてしまうのは却って興ざめでもある。「待つ」という期待の時間を奪われてしまつからだ。時間をかけて言葉を探し、自分の思いをなんとか相手に伝えたいと書いた手紙にあっけなく返事が返ってきたら、うれしさがちょっと希釈されたように感じないだろうか。

若者のケータイメールの世界では、来たら「お返す」に返信するのが原則であるらしい。二、三日寝かせてから返事をということにはまずないようだ。

返すまでの時間の短縮を優先すれば、内容が希薄に、かつ短くなるざるを得ない道理である。コンピュータからのメールでさえ、その文面は概ね短く、事務的である。ツイッターでは、最大文字数が一四〇字以内で制限されているという。まさに「短くだけ」すばやく、短い情報のキャッチボールに価値が置かれている。



私も日々メールのお世話になつており、いまやそれが生活に活は考えられない。その一方で、メールは「思い」を伝えるのに適した通信手段なのだろうかという疑問も拭いがたくある。

ケータイメールでの短いやり取りは、「用を足す」という目的のためには最適である。「あと五分で着くからね」と、昔は電話で伝えていたところをメールで送る。これで用は足りる。しかし、これであるままとまった思いを、そして自分が何を考えているのかを相手に伝えようとするのは、まず無理だろう。一四〇字でどれだけかまると

た思いが伝えられるだろうか。短歌はわずか三十一文字。名言格言などもたいして短い。それでも人の心を震わせるようなものがあるではないかと言われれば確かにそうである。しかしそれは、短い言葉に凝縮するための、圧倒的な長さの時間を経てやっと見つけられた言葉なのだ。さらっと出たものではない。



肉筆で手紙を書いていた頃、書くという行為のなかで、自分の考えが徐々に整理されていくのを実感できた。誰もが使うべきあいの言葉を選び、自分の実感にもっともフィットする言葉を探しながら書くという行為は、自分の考えを整理することにも、思つてもいなかった考えの飛躍をももたらすことがある。言葉にする前は、何か深遠なことを考えているようでも、実はほとんど考えていないに等しかったということによく経験することだ。実際に文字にし始めると、実は何を書きたかったのかさえはつきりしていなかったことに気づくことも珍しくない。つまり、私たちはそれほどにも、日常何かを突きつめて考えるということが少ないのだ。

独断の断片化を覚悟で言えば、メールやツイッターは「思考の断片化」を促進していると思つている。短い言葉だけで「用を足す」生活に慣れ過ぎると、もろくを基本に立ち返つて考えるという習慣に乏しくならざるを得ない。「用を足す」だけの短文で、身のまわりの友人や、まして恋人と繋がっていて、ほんとうに大丈夫なのか、と余計な心配をしたくもなるのである。

手紙には待つという期待があった
用を足す短文だけで大丈夫なのか
時間をかけ言葉を探してみようか

※コラムへの感想をメールでお寄せください。minna@mb.kyoto-np.co.jp

京都産業大教授(細胞生物学)、歌人